

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：32602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820037

研究課題名(和文)江戸歌舞伎における興行慣習の実証的研究

研究課題名(英文)The factual studies of the theatrical customs in Edo-Kabuki

研究代表者

佐藤 知乃(SATO, Chino)

亜細亜大学・法学部・講師

研究者番号：90422352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：日本近世演劇の基盤資料整備を進めつつ、そこに立脚して江戸歌舞伎の芸能環境を実証的に追究した。文字を主体とする資料では、西尾市岩瀬文庫の江役割番付集の書誌調査と興行情報細目の抽出をおこなった。視覚資料である役者絵については、ホノルル美術館において、紅摺絵を中心に色摺技法を分析するとともに、フランス国立図書館をはじめとする諸機関において、役者絵本『絵本舞台扇』の諸本を比較調査した。

上記役割番付や入手した役者絵にもとづきながら、特定の芸能環境として、江戸歌舞伎の興行慣習「曽我祭」関係資料を収集し、その実態を検証した。

研究成果の概要(英文)： Carrying forward to prepare the fundamental printed materials of Japanese dramas in the Edo period, this research stood upon them and investigated the circumstances of performing arts. In the materials which based on characters, it conducted the survey on the theatrical Banzuke collections at Iwase Bunko Library. In the visual materials, mainly on the Benizuri-e collections at Honolulu Museum of Art, and the multiple sets of the illustrated actor's book "Ehon-butai-ogi" comparatively at la Bibliotheque nationale de France and other institutions.

Rooted in Banzuke mentioned above and actor's illustrations obtained, it gathered detailed printed materials about Soga-festival in Edo-Kabuki, and examined the actual conditions as the specific circumstances of Kabuki.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：近世文学 近世演劇 歌舞伎 役者絵

1. 研究開始当初の背景

(1) 物語と和歌を二本柱とする日本古典文学研究では、歌舞伎を研究するにあたって、文字ベースの脚本分析が重視されてきた。しかし演劇研究の場合は、戯曲のみならず、演者や観客や興行といった、芸能をとりまく諸環境を含めて考察するという観点が不可欠である。

(2) 近世演劇の分野では、こんにちのポスターやチラシやパンフレットに相当する芝居番付の整理が進んできた。劇場出版物である諸番付を一次資料とするなら、それらや役者評判記にもとづいた江戸出来の年代記は二次資料となり、それらと評判記を利用した近代の興行年表は三次資料といえることができる。

原拠にまでさかのぼることができるのなら、それにもとづいて研究をおこなうべきことはいまでもない。番付は微細な資料ながら、全体としては膨大な点数が残存しており、その目録化は地道に続けなければならない作業である。

(3) 番付にも絵入のものは少ないが、近年、本格的な画証資料として、役者を画題とする浮世絵が、歌舞伎資料としていちだんとクローズアップされつつある。

2. 研究の目的

(1) 近世期における(土地としての)江戸歌舞伎は、上方歌舞伎に比してつよい様式性を維持し、独特の興行慣習を形成してきた。正月に幕を開けた曾我狂言がロングランとなり、5月まで続いたとき、兄弟討入の5月28日を中心に、劇場内外で催された曾我祭もその一つである。

特定の芸能環境として、ここでは、この曾我祭に注目する。幕内では古くよりおこなわれていたらしいが、それが舞台で披露されたはじめは、宝暦3年(1775)中村座の『男伊達初買曾我』とも伝える。一方、6年市村座の

『梅若菜二葉曾我』を根元とする文献もある。『初買曾我』については調査済みであるので、今度は『梅若菜』について詳しく調査する必要がある。

(2) 西尾市岩瀬文庫の芝居番付集『〔扮苑〕』は、主として江戸役割番付の集成である。全23冊のうち「前輯」2冊は不完全な写本だが、観劇記録ともいべき書入がままた見られ、興味ふかい。どのような立場の人間によって写され、成立したのか、識語の写し2種とともに検討する。同時に、興行情報細目等を抽出し、目録化をおこなう。

(3) 同じく岩瀬文庫所蔵芝居番付集『〔戯場番文〕』全19冊の書誌調査および標準的な目録化によって、(2)の作業と合わせて、近世演劇の基盤資料整備に寄与することが目的である。

(4) 初期浮世絵の収集で知られる、ホノルル美術館ミッチェナーコレクションの原本調査。(1)『梅若菜二葉曾我』とも時代の重なる、宝暦期(1751-63)の資料を集中的に閲覧し、前錦絵期の色摺技法を吟味する。また拙著『近世中期歌舞伎の諸相』に図版掲載すべき作品の原本の書誌を確認する。

(5) 明和7年(1770)初版の『絵本舞台扇』は、創始されてまもない錦絵の技法を採用し、本格的な似顔表現に挑んだ画期的な彩色役者絵本であり、1年足らずで改刻本が摺られ、安永7年(1778)には改竄本というべき『絵本続舞台扇』が上方で版行され、以後も文政2年(1819)まで版を重ねるなど、多大な人気を得た。

フランス国立図書館に数組の『舞台扇』が所蔵されるほか、在パリの諸機関にも複数の『舞台扇』が見いだされる。これらの比較調査をおこない、『舞台扇』諸本の複雑な関係を解明する。

3. 研究の方法

(1) 宝暦6年『梅若菜二葉曾我』につき、所蔵機関を横断して関連資料を幅広く収集す

る。諸資料の先後関係を読みとき、そのこと
によって興行の進行過程をつかみ、狂言『梅
若菜』を再構成するとともに、曾我祭舞台化
の様相を究明する。

(2) 『〔扮苑〕』は、ほぼ江戸役割番付から
なる貼込帖である。芝居番付目録の標準にの
っとり、資料番号、和暦(西暦)、月日、劇
場、版面にあらわれるすべての名題とそのよ
み、備考、地域、番付の種別といった、興行
情報・書誌情報を抽出する。

全 23 冊のうち「前輯」2 冊は不完全な写本
であり、本文中には観劇メモともいうべき書
入が見うけられ、末尾には識語の写しが 2 つ
ある。それらの内容を検討し、役者評判記や
年代記等との比較検討をおこなう。

(3) 『〔戯場番文〕』も、大部分が江戸役割
番付によって構成される。同様に芝居番付目
録の標準にのっとり、資料番号、和暦(西暦)、
月日、劇場、版面にあらわれるすべての名題
とそのよみ、備考、地域、番付の種別といっ
た、興行情報・書誌情報を抽出する。

(4) ミッチェナーコレクションのうち、宝暦
期資料(おもに紅摺絵)の原本を閲覧し、色
摺技法の精密な調査をおこなう。また拙著
『近世中期歌舞伎の諸相』に図版掲載すべき
作品の、改刻の疑われる部分を仔細に検討す
る。

(5) フランス国立図書館および在パリの諸機
関において、『絵本舞台扇』の原本を閲覧し、
書誌調査を実施し、機関が許可する場合は写
真撮影をおこない、許されない場合は機関に
写真を依頼する。

諸本の関係は複雑であるので、まず序跋等
の改刻によって大まかに系統分類し、次によ
り細かな書誌事項の検証をおこなう。

4. 研究成果

(1) 宝暦 6 年市村座上演『梅若菜二葉曾我』
に関し、国立国会図書館、早稲田大学演劇博
物館、東京大学総合図書館、西尾市岩瀬文庫

等の機関において、関係資料の調査収集をお
こない、『梅若菜』の興行の様相を解明し、
当該興行が曾我祭の可視化、年中行事化に大
きな役割を果たしたことをあきらかにした。

曾我祭が舞台にあげられたはじめは、後年
の記録のとおり、宝暦 3 年中村座『男伊達初
買曾我』であったかもしれないが、3 年当時
の上演資料を精査しても、曾我祭の上演は検
証できない。第一次資料をもって曾我祭の舞
台化を確認しうる最初例はやはり『梅若菜』
である。しかも資料の量は豊富で、その様相
を具体的につかむことができた。

なお(4)と関連して、ホノルル美術館ミッ
チェナーコレクション中にも、曾我祭関係資
料を見いだすことができた。幕内の祭礼であ
った曾我祭が舞台化され、興行に組み込まれ
ていくのが宝暦期(1751-64)で、以後幕末に
いたる曾我祭の展開について、さらにいくら
かの調査考察を加え、江戸歌舞伎の曾我祭の
生成衰退について報告をおこなう予定であ
る。

(2) 岩瀬文庫『〔扮苑〕』全 23 冊に貼り込
まれた番付から興行情報の細目を抽出し、芝
居番付目録として発表する用意がととのった。

『〔扮苑〕』成立をめぐる事情については、
所蔵者の印記のうち難読のものが一つ残っ
ており、なお調査を必要としている。

(3) 同じく西尾市岩瀬文庫『〔戯場番文〕』
全 19 冊に集められた番付から興行情報の細
目を抽出し、芝居番付目録として発表する用
意がととのった。

付随的に、天明・寛政年間(1781-1801)に
おける本櫓(中村・市村・森田のいわゆる江
戸三座)の退転と復興をめぐる興行事情が、
番付の版面にも表出していることが確認で
きた。

(4) ミッチェナーコレクションの調査では、
おもに紅摺絵(おおむね宝暦記資料)の原本
を集中的に閲覧し、色板がしだいに増え、板

ずれもじょじょに収束していく様子を、つぶさに検分することができた。紅摺絵全般に関して詳細にレポートするには、まだ幅広い調査を要するが、錦絵開始直前の色摺技法の進展の方向について報告する用意がある。

(5) 『絵本舞台扇』の複製本が大正6年に刊行された際には初版本が得られなかったが、近時プルヴェラーコレクション本(現フリーア・サックラー美術館所蔵)が初版として紹介された。この系統では、天の巻冒頭に「撰陽西鶴孫東鶴」による漢文序1丁半、北在転、仲祇徳による和文序1丁半が備わり、本文に先立って口絵2丁を置く。人の巻末尾には「四時発句曰」として芭蕉や西鶴から春章、文調にいたる38名の発句を載せる3丁、礪川散人普通観菊堂による跋1丁、在転、祇徳、菊堂の発句半丁がつき、刊記は「明和七庚寅年孟春」とする。

だがプルヴェラー本には、通常の木版本としては未完成なところがある。丁付(ノズルに相当するもの)の不備である。丁付の数字は天の巻に4か所、地の巻に4か所あるものの、数字と丁数は必ずしも合致しない。しかも丁付の彫り残しが、天・地の巻に各11か所、人の巻に9か所ある。大英博物館本は原表紙を欠く改装合本ながら、これらの大部分を浚い、地の巻にのみ2か所の彫り残しがあるほかは、序跋はプルヴェラー本と同内容である。水田美術館本は、明和7年霜月の顔見世で改名する役者や下り新役者の立姿3丁半を口絵の次に増補し、本文も1部訂正したもので、和文序からは北、仲の名を削る。これと同系統にあると見られるのが国会図書館本で、本文訂正は水田本より進み、刊記からは「孟春」が削られ、出版は明和7年末と判断される。

版本は柱かゝりに丁付を刻むのが一般的である。その丁付を整えぬまま摺られたプルヴェラー本は、この豪華絵本を成立させた菊堂、在転、祇徳ら江戸座俳人ネットワークに

おける試行版、配り本であった可能性がある。

『舞台扇』では文調と春章がそれぞれどの役者を描くかの分担に一定の傾向があり、見開き左右の役者の取合せにも配慮している。さらに役者たちはしばしば東西を往来し、位付も変化するため、プルヴェラー本では絵の配列を容易に決定しかねており、そして大英本では逆に丁付を除去することで本を整備し、この段階で『舞台扇』は本格的な商品として売り捌かれることになったのではないだろうか。水田本や国会本は明和八年度の役者の動向という新情報を加えた改刻本ということになる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

佐藤 知乃、歌舞伎の画証資料 芸能と絵画、総合学術文化学会、2014年3月14日、於垂細垂大学

〔図書〕(計1件)

佐藤 知乃、和泉書院、近世中期歌舞伎の諸相、2013年6月、386頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 知乃 (SATO, Chino)

垂細垂大学・法学部・講師

研究者番号：90422352